

# 北海道の

# 別という地名

高橋昭一

えぞうぶ寄稿

平成十七年八月十五日

(色の濃い川、濁れる川 温泉が流れ込んで濁る川の意)であり、江別(えべつ)、「エベツ」(胆汁のような川、他に諸説あり)本別(ほんべつ)、「ポンペツ」(小川)、紋別「モペツ」(大いなる川)、芦別(あしべつ)、「アシベツ」(灌木の中を流れる川)、陸別(りくべつ)、「リクンペツ」(高い危ない川)、札幌(さつぽろ)は、元々は札幌別(さつぽろべつ)、「サポロペツ」と呼ばれたものが何らかの理由で省略されたとするのが有力。意味は、乾いた大きな川。

①・北海道には、別という地名が多い。すなわち登別、紋別、江別、芦別、土別など。地名好きの私、前からちよつと気になっていた。PCYVANNEC BIGLOBEのパソコン通信ネットワーク)に以前私が入りしていたSIG(シグ)に、帯広の北東に位置する本別の方がいたので、その由来などを尋ねたことがある。結局その人からはレスは返ってこなかったが、市立図書館で「地名アイヌ語小辞典」という小さな薄い本が目に入ったことで、つまるところ自分で調べることになった。

北海道の 別という地名、北海道のほかの多くの地名がそうであるように先代アイヌ人の付けた地名から由来している。そしてこの“別”からも、アイヌ人の和人とは違う考え方、発想そして時に生きざままでもがかいま見られて興味深いものがある。“別”とは、アイヌ語で

ᐃᐱᐱᐱ (第3人称ベチ)川の意味である。漢字は、日本語の読み置き換えたのだろう。川はアイヌ人の生活には切り離されない存在のようで、いろいろな形容をされた“川”が地名そのものになっているのである。内地にも川の名前そのものが地名になっている例もあるだろうが、それはぐつと数少ないだろう。北海道の別という地名は市町村の地名のほか、ごく小さい地名を加えれば無数といった方がいくらいっぱいありそうだ。「日本地図地名辞典」(三省堂)ほかの資料によれば登別(のぼりべつ)、「ヌブルペツ」

「色の濃い川、濁れる川 温泉が流れ込んで濁る川の意)であり、江別(えべつ)、「エベツ」(胆汁のような川、他に諸説あり)本別(ほんべつ)、「ポンペツ」(小川)、紋別「モペツ」(大いなる川)、芦別(あしべつ)、「アシベツ」(灌木の中を流れる川)、陸別(りくべつ)、「リクンペツ」(高い危ない川)、札幌(さつぽろ)は、元々は札幌別(さつぽろべつ)、「サポロペツ」と呼ばれたものが何らかの理由で省略されたとするのが有力。意味は、乾いた大きな川。

②・このように北海道には、別という地名が多いのだが、別が川という意味以上に、前代アイヌ人の川というものに対する考え方、捉え方に強い興味を引かれた。

「地名アイヌ語小辞典」(知里真志保著、北海道出版企画センター刊、昭31.3刊、昭59.3復刻)の記述によれば、あまし次のようなものである。前代のアイヌ人たちは、川に対して特別な考え方をもっていた。まず、彼らは川を、人間と同様な生き物としてとらえていた。だから、人でもある川は、人体と同じような体の部位名を持つのである。水源は「川の頭」(-pet-kityay)であり、中流は「川の胸」(-pet-rantom)、河口は「川の陰部」(-pet-o)である。支流は「川の腕」(-pet-aw)であり、曲り角は「ひじ」(-sittok)であり、幾重にも曲がりくねっているところは「小腸」(-kankani-yospe)である。人間だから「夏やせ」(-sattok)、「死に」(-kay)もする。当然また、子を産んだり、親子連れで山野を歩く。(-pon-poro-ne-oneな

次に私たちは、川は山から出で、海に注ぐものと思っているが、前代アイヌ人は違うのである。逆なのである。川は、海から来て、山へ行く生き物であると考えていた。

地名にも、擬人化したそれがあらわれているという。「オマンペツ」(oman-pet 山奥へ行っている・川)、「シノマンペツ」(si-no-oman-pet ずっと・山奥へ行っている・川)、「リノマペツ」(ri-no-ma-pet 高い所へ登って行く川)等。

また、私たちが川の出発点と考える「水源」「みなもと」と名付けているものは、アイヌ人は川の帰着点であるとした。「ペテトク」(pet-took「川の行く先」)、「ペツキタイ」(pet-kityay「川の頭の先」)等。さらに、私たちが川の合流するところを落合と呼んでいるのに対し、彼らは「ペテウコビ」(pet-u-kobi、すなわち「川の分かれて行く所」と名付けているのも同じ考えから来ているというのである。あるいは、「ペユニホパケ」(pet-yuni-hopake)捨て・あつ)、「ネ」ところ)、川が互いに相手を捨て合う所。すなわち海の方からずつと一緒に連れ合って登って来た夫婦が、その場所で夫婦別れをして、別々になる、といったような考え方だというのである。

③・北海道には、別という地名が沢山あるが、それは先住のアイヌ人のつけた地名に由来する。「別」とはアイヌ語で、「pet」(ペツ)川の意味。そしてアイヌ人は、川は海から上がった山へ行くものと考えた。かつ、川を人間同様の生きものとした。ではどうして、アイヌ人たちは、このような考え方を持つようになったのだろうか。「地名

アイヌ語小辞典」の著者、知里真志保さんは次のように考察している。これは、アイヌ語研究での一般的な見方でもあるのだろう。

もともと、アイヌ人は、海岸線に沿って集落を作っていた。そして、内陸への交通は主として川によった。集落の側を流れる川を遡つては、サケやマス、熊や鹿をとったりして暮らしてきた。実生活に即して、川を遡って山へ行く生活の長い積み重ねの中から、川についてそのような考え方が自然に生まれてきたのである。そこで、「川口」などといっても、アイヌの場合、「河口」「落口」ではなく、気持ちは「入口」なのだとも。なお、普通、川は女性に考えられているという。

川についての考え方は、北海道のアイヌも、千島のアイヌ、樺太(サハリン)のアイヌ人も同じなのだろう。「別」は地名になっているが、むろん元来の川の名前にもなっている。北海道の地図で海岸線を巡ればいくつも見つけられるだろう。例えば道南の、後志利別川、尻別川、道東の頓別川、徳志別川、湧別川、西別川。

もつとも和人としては、地名はともかく、川にはやはり川という名前を付けなければ収まらないというわけが、「別」の後に川がみについている。

ところで、アイヌには、*pet*、*pett*のほか、に川を意味する言葉がもうひとつあるのである。「内」に音訳されている *ney*、*ナイ* である。

前述の「地名アイヌ語小辞典」によれば、北海道の南西部では、*pet* を普通の川の意に

使い、*ney* は、谷間を流れて来る小さな川の意に限定しているのだという。

樺太では、逆に、*ney* が普通に川の意を表し、*pet* は、特に小さな川を表すとしている。しかし、古謡では、*pet* を普通に使うと記述している。北千島では、全くというほど *ney* はつかわれないうもいう。なお、*pet* の方は、本来のアイヌ語、そして *ney* の方は外来語らしい。川のことを、古い朝鮮語ではナリ、現代方言でも朝鮮の一部にナイといっている地域があるようだ。

北海道の地名の別と内をみると、偏りなく混在しているが、別の方が多い感じだ。

稚内(わつかない) アイヌ語のヤムワツカナイ(冷水沢)に由来。ヤムが省略された。歌志内(うたしなない)「オタウシユナイ」(砂原の多い川)、静内(しずない)「シユトナイ」(ぶどうのある沢)、黒松内(くろまつない)「クルマツナイ」(和人の女性のいる川)、そのほか、木古内、岩内、中礼内など。

#### ④・北海道にはの 別という地名、

内という地名が沢山あるが、それは先住のアイヌ人のつけた地名に由来する。実は東北地方にも「別」は少ないものの、「内」のついた地名が多く残っていることが指摘されている。

東北地方の別と内の実例として、工藤雅樹著「蝦夷の古代史」(平凡社)では次のような例を紹介している。「別」例では秋田市仁別(にべつ)、津軽半島の今別(今別)。ま

た苫米地(青森県三戸郡福地村)のほか、淵、部、辺、壁、首の地名も *pett* に由来する可能性があるとしている。

馬淵川(まべちがわ:岩手県北部に発し青森県八戸市で太平洋に注ぐ)、長流部(おさるべ:岩手県二戸郡浄法寺町)、母衣部(ほるべ)、母衣部沢(岩手県二戸郡安代町兄畑)。「内」の例としては、十腰内(とこしなない:弘前市)、平内(ひらなない:青森市)、小保内(おぼない:秋田県仙北郡田沢湖町)毛馬内(けまない:秋田県鹿角市)柴内(しばない:秋田県鹿角市)、玉内(たまない:秋田県鹿角市)、相内(青森県三戸郡南部町)、行内(ゆくくない:秋田市)とかなりの数に。一説では数百とも。

このように東北地方にはアイヌ語地名が数多く存在するのだが、これをどのようぬ考えたらいいだろうか。いろいろ説はあるものはつきりした答えは固まっていないうだ。

言語学者の大野晋さんは、地名が残っているのはアイヌ人がそこに住んでいた証拠だとする。そうでなくとも、東北の蝦夷(えぞ・えみし)はアイヌ語と同じ系統の言語を持っていたことを示す有力な証拠だとされる。

もつともアイヌ人が住んでいたとしても1000年以上前のことだろう。また、アイヌ人は日本人とは別の人種と持っている人が多くいるが、決してそうではないという考えも出てきているようで、アイヌ人もアイヌ語についても更に謎が深まっているらしい。アイヌ人は渡来弥生人に追われた縄文人の子孫という説もある。(おわり)